



ISSN 2432-9576

ENSG, No.5, 2022 年3月発行

ENSG

(Ethnicity, Nation, State, and the Globe)

No.5

エスニック・マイリティ研究 第5号

エスニック・マイリティ研究会 2022 年 3月

『エスニック・マイノリティ研究』第5号

目次

エッセイ

- 陸海軍を備えた方言を書かれた通りに読む：社会言語学の出典を訪ねて
——中澤 拓哉——7
 - ICCEES第10回大会参加記録
——辻河 典子——13
 - ICCEES2021（カナダ・モントリオール／オンライン）体験記
——森下 嘉之——17
 - 今後の研究会活動に向けてのノート：ロザンヴァロンの著作を一読して
——松岡 格——19
 - 電子書籍『多様性を読み解くために』の授業内使用に関する報告
——香坂 直樹——21
- 会員近況—————25
 執筆者一覧・編集後記——29

エッセイ

陸海軍を備えた方言を書かれた通りに読む

—社会言語学の出典を訪ねて

中澤 拓哉

1. はじめに

ある分野では非常に有名な成句であっても、その出典までが正確に知られているとは限らない。人口に膾炙した「パンがなければお菓子を食えばいいのに」も、実際にはマリー・アントワネットのものではないのだという。これが彼女のものだと誤って伝わったせいで、とある劇場アニメでは敵チームの主将が四六時中ケーキを食べる羽目になったのである。また、しばしばスターリンやアイヒマンのものとして引用される「一人の人間の死は悲劇だが、百万人の死はもはや統計である」という言葉も、彼らとはまったく関係がないらしい¹。

私は旧ユーゴスラヴィア地域を専門とする研究者であり、歴史学の他に社会言語学にも関心を持っている。このような研究領域に生きる人間であれば、「話すように書き、書かれたとおりに読め」と「言語とは陸海軍を備えた方言のことである」という 2 つの成句に聞き覚えがあるだろう。前者はセルビア語正書法の原則を、後者は「言語」と「方言」の区分を言い表した言葉として有名なものであり、いずれも多くの人が厳密な典拠を気にせず口にする成句であると言ってよい。

では、これらの成句の正確な出典は何だろうか？ それを調べてみたのが本稿である。

一応付け加えておくと、もちろんこれらの調査に学術的な新規性があるわけではなく、本稿で行っているのはあくまで豆知識の裏取りに過ぎない。しかしこれはあくまで「論文」ではなく「エッセイ」なので、車輪を再発明しても許されるだろう。

2. 「話すように書き、書かれたとおりに読め」

私がセルビアの首都ベオグラド (Beograd) にある土産物店で購入した T シャツに、セルビア語のキリル文字一覧表を印刷したのものがある。海外の学会にこれを着ていったところ狙い通り現地の研究者に大受けしたのでいたく満足したのだが、その T シャツには小さく「話すように書き、書かれたとおりに読め (piši kao što govoriš, čitaj kako je napisano)」との文句があしらわれている。

このセルビアでは誰もが知っている有名な成句はしばしばヴークに帰せられるが、既にサヴァ・ムルカリ (Sava Mrkalj)²が 1810 年の小冊子『厚いイェルの脂肪もしくは文字の選別』で、

¹ 沼野充義「悲劇と統計——スターリンは本当にそんなことを言ったのか？」『れにくさ』2号 (2010) : 13-18。

² ムルカリの生涯とその言語改革について、詳しくは、Gordana Ilić Marković, “Савва Мркаљ / Mercail Sabbas –

...От данас све наше правописаніе под ово долази начало: Пиши како што говориш...³

試訳：……今日よりすべての我々の正書法はこの原則の下にもたらされる：話すように書け。……

と書いているし、そもそもヴーク自身が、『セルビア語辞典』において、1783年にドスイテイ・オブラドヴィチ (Dositej Obradović) が同様の原則を表明していたと書いている⁴。

当時の知識人のあいだで知られていたこの成句は、直接的には18世紀ドイツの言語学者ヨハン・クリストフ・アーデルング (Johann Christoph Adelung) に由来する⁵。彼は1781年の『ドイツの言語教育』で、

...Daher ist das erste Grundgesetz für die Schrift aller Sprachen: Schreib, wie du sprichst.⁶

試訳：……したがって、あらゆる言語の記述のための第一の根本原則は「話すように書け」である。

と述べたほか、1788年の『ドイツ語の正書法のための完全な指導』においても、

Schreib wie du sprichst ist das höchste und vornehmste, und wenn man die folgenden nähern Bestimmungen dazu nimmt, auch das einzige Grundgesetz für die Schrift in allen Sprachen...⁷

試訳：話すように書けというのは至上かつ最重要の、そして以下のより詳細な規定をそのために採用するのならば、そのうえ唯一のあらゆる言語の記述のための根本原則である。……

と書いた。この著書にムルカリなどの言語改革者は影響を受け、「話すように書け」という原則を採用することになったのだ。

この成句がアーデルングに由来することはよく知られており、インターネット上で「話すように書き、書かれたとおりに読め」と検索すると、「本当は誰が言ったのか」というテーマの記事がいくつも出てくる。そこでアーデルングに触れられることは多いが、この成句がより古い起源を持っていることはあまり知られていないようだ。

近代ヨーロッパにおける言文一致——すなわち「俗語」の標準化——の先鞭をつけたと評されるのが、1492年にアントニオ・デ・ネブリハ (Antonio de Nebrija) によって著された『カスティール語文法』である。同書は初めての「俗語」の文法書であり、スペイン帝国の支配を堅固なものとするためにはカスティール語を文語として精錬せねばならないと主張し、近代における言語改革の嚆矢となった⁸。

Merkaly Szabbas: Arhivalije o životu i smrti," u: *An den Anfängen der serbischen Philologie: Salo debeloga jera libo azbukoprotres von Sava Mrkalj (1810–2010)*, ur. Gordana Ilić Marković i dr. (Frankfurt am Main i dr.: Peter Lang, 2012), 103–127; 西原周子「サヴァ・ムルカリの表記システムにおける二重字」『スラヴ学論集』16号 (2013) : 98–114 を参照。

³ *Сало дебелога ера либо Азбукопротрес* (Будим, 1810), 18.

⁴ Вук Стефановић, *Српски рјечник истолкован њемачким и латинским ријечма* (Беч, 1818), v.

⁵ Miloš Okuka, *Sava Mrkalj als Reformator der serbischen Kyrilliza: Mit einem Nachdruck des Salo debeloga jera libo Azbukoprotres* (München: Verlag Otto Sagner, 1975), 44; 西原「サヴァ・ムルカリの表記システム」98。

⁶ Johann Christoph Adelung, *Deutsche Sprachlehre: Zum Gebrauche der Schulen in den Königl. Preuß. Landen* (Berlin: Voß, 1781), 577.

⁷ Johann Christoph Adelung, *Vollständige Anweisung zur Deutschen Orthographie, nebst einem kleinen Wörterbuche für die Aussprache, Orthographie, Biegung und Ableitung* (Frankfurt und Leipzig, 1788), 28.

⁸ 詳しくは、岡本信照『「俗語」から「国家語」へ——スペイン黄金世紀の言語思想史』(横浜: 春風社, 2011) を参照せよ。

その『カスティリヤ語文法』には、次のような記述がある。

……これらの事柄をより明確に説明するために、我々は、正書法について論述する人みなが、あらかじめ前提としていることを、ここでも再確認しておきたい。まずは、我々は発音するがままに書き、書くがままに発音しなければならない、ということで、こうしないことには文字が出来たことも無駄になってしまうからである。……⁹

1517年の『カスティリヤ語における正書法の規則』では、第2の原則として次のものが掲げられた。

我々は話すがままに書き、また書くがままに話さなければならない。……また、発音されない文字が書かれたり、あるいは逆に、書かれていない何かの文字が発音されたりすれば、これは、語りうることをすべてを指し示すための文字の形が不足し、そのためにやむなく起こることなのであろう¹⁰。

アーデルングの記述はこのようなネブリハの理念を継受したものであろう。これはルネサンス期スペインの文法学者のあいだでは共有された理念だったが¹¹、さらに遡ると古代ローマの修辞学者クインティリアヌス (Marcus Fabius Quintilianus) に行き着く。彼は後1世紀の著書『弁論家の教育 (*Institutio Oratoria*)』において、次のように書いた。

……私としては、慣用として通用している場合を除いて、発音するとおりにすべてを書くべきだと思います。というのも、文字を使用するのは、いわば委託された財産のように、発音をそのままに保ち読者に返還するためなのですから。したがって文字というものは、われわれが口にするであろう音を表わしていなければならないのです¹²。

実際にネブリハ自身も「これがためクインティリアヌスは……子供たちも、幼いときから、将来のいつか用いるはずの文字の発音全部に慣れ親しんでおくべきだ、と知っているのである」¹³として、成句の出典をクインティリアヌスに帰している。この記述は、これが当時の文法学者にとっては常識に属する部類の成句であったことを窺わせる。

つまりこの成句は古代ローマの修辞学に由来し、ルネサンス期以降の言語改革にもなって言文一致の理念としてヨーロッパ各地で用いられるようになったものなのである。たとえばベラルーシ語の正書法を論ずるに際して「聞いたように書け (Пішы так, як чуеш)」という成句が持ち出されるなど¹⁴、類似

⁹ エリオ・アントニオ・デ・ネブリハ (中岡省治訳) 『カスティリヤ語文法』 (吹田：大阪外国語大学学術出版委員会、1996)、20。

¹⁰ 中岡省治「アントニオ・デ・ネブリハ著『カスティリヤ語における正書法の規則』 (翻訳)」『大阪外国語大学論集』16号 (1996) : 152。

¹¹ 岡本『「俗語」から「国家語」へ』117-119。

¹² クインティリアヌス (森谷守一ほか訳) 『弁論家の教育 1』 (京都：京都大学学術出版会、2005)、100。

¹³ ネブリハ『カスティリヤ語文法』14。

¹⁴ Киёсава Сиори, “Переосмысление роли «Белорусской грамматики для школ» Б. Тарашкевича в процессе становления белорусского литературного языка,” в: *Грамматика в обществе, общество в грамматике: Исследования по нормативной грамматике славянских языков*, ред. Номати Мотоки и Киёсава Сиори (Москва: Издательский Дом ЯСК, 2021), 79。

した成句は他の言語でも見出すことができる。

セルビアで暮らしていたときにしばしば目にしたこの言葉がこれほど古い来歴を持っているとは、調べてみるまで思いもよらなかった。古代史だけでなく近代史の研究に際しても古典の素養が重要であることを実感させられる調べ物だった。

3. 「言語とは陸海軍を備えた方言のことである」

この成句は、社会言語学分野ではよく知られている。国家権力を背景にした言語変種 (variant) が「言語」としての地位を与えられ、それ以外の変種は「方言」として一段低い地位に置かれることを一言で表現した成句であり、社会言語学の概説書ではしばしば言及される。

かつて私がとある投稿論文でこの成句を常識に属するものだろうと思って特に断りもなく引いたところ、査読者から「典拠をつけなさい」というお叱りをいただいたことがあった。気になって社会言語学の概説書をいくつか確認してみたが、当時の私には典拠を探し出すことはできず、手がかりはそこで途絶えてしまった。論旨に絶対に必要な引用というわけではないので横文字の本まで調べる気力が起きず、出典のあやふやな孫引きをするくらいならとその文言は削ったのだが、それ以来この言葉は頭の片隅に引っかかり続けていた。

今回、改めて出典を調査してみると、この言葉は、戦間期にユダヤ学研究所、通称イーヴォ (איוו; yivo) を設立し、ナチスの迫害を逃れてアメリカに移住したユダヤ系言語学者マクス・ヴァインライヒ (Max Weinreich)¹⁵のものであると紹介されることが多い。しかしその理解は誤っている。以下でその発言の文脈を二次文献に依拠して紹介し、当該部分について——二次文献の英訳を参照しつつ、イディッシュ語の入門書や辞書と格闘しながら——日本語訳を試みる。

第二次世界大戦中、ヴァインライヒは「イディッシュ語史の諸問題」という講義を開講していたが、ある日、幼少期にアメリカに移住し、現在はブロンクス (Bronx) の高校で教師をしているというひとりの聴講者から、次のような質問を投げかけられたという¹⁶。

וואָס איז דער חילוק פֿון אַ דיאַלעקט ביז אַ שפּראַך?

転写：vos iz der khiluk fun a dialekt biz a shprakh?

試訳：言語と方言との違いは何でしょうか？

ヴァインライヒが答えようとする、男性はそれを遮り、こう続けた。

דאָס ווייס איך, אָבער איך וועל איך געבן אַ בעסערע דעפֿיניציע: אַ שפּראַך איז אַ דיאַלעקט מיט אַן אַרמיי און פֿלאָט

転写：das veys ikh, ober ikh vel aykh gebn a besere definitzie: a shprakh iz a dialekt mit an armey un flot

試訳：それは知ってますが、私をもっと良い定義をあなたに〔教えて〕差し上げましょう——言語とは陸海軍を備えた方言のことですよ〔強調は原文ママ〕

¹⁵ 日本語では「マックス・ワインライヒ」と表記されることが多い。イディッシュ語では מאַקס וויינרײַך (maks vaynraykh) と綴る。ヘブライ文字には大文字と小文字の区別がないため、以下、イディッシュ語のラテン文字転写にあたってはすべて小文字で表記する。

¹⁶ Alexander Maxwell, “When Theory Is a Joke: The Weinreich Witticism in Linguistics,” *Beiträge zur Geschichte der Sprachwissenschaft* 28, no.2 (2018): 264.

ヴァインライヒは、『イーヴォ紀要 (עיון-בלעטער; vivo-bleter)』25号に寄せた「イーヴォと我々の時代の諸問題 (דער ייוואַ און די פּראָבלעמען פֿון אונדזער צייט, der yivo un di problemen fun undzer tsayt)」という文章でこの出来事に触れた¹⁷。すなわち、この言葉を口にしたのはヴァインライヒではない。ヴァインライヒは男性の言葉を引用しただけであり、彼は紹介者として重要ではあるが発明者としての榮譽を与えるのは誤りと言わねばならない。この言葉を「ヴァインライヒの言葉」として紹介している文献はいくつかあるが、それらには訂正がなされねばならないだろう。

さらに、アオテアロアの歴史学者アレグザンダー・マクスウェルは、ヴァインライヒはこの言葉がイディッシュ語——当然陸軍も海軍も持たない——の「言語」としての地位を脅かすものであると考え、否定的な考えを持っていたことを指摘している¹⁸。したがって本来であれば二重の意味でヴァインライヒにこの成句を帰属させることはできない。

しかしこの言葉は1968年に英語のベストセラーの中で引用されたのをきっかけに人口に膾炙し、不正確な孫引きを繰り返されてきた¹⁹。なかには、マクスの息子ウリエル (Uriel Weinreich) や、著名な言語学者ノーム・チョムスキー (Noam Chomsky)、さらにはフランスの将軍ユベール・リョテ (Hubert Lyautey) を出典とする文献もあるという²⁰。すなわちこの成句は、これまで多くの研究者によって誤って引用されてきたものなのである。

これは私にとっても大いに恥じ入るべきことと言わねばならない。というのは、前述したように、私がこの語をなんの出典も示さず孫引きしようとしたことがあるからであり（それを止めてくれた匿名の査読者には改めて感謝の念が湧いてくる）、そしてもう1つは、別の本を分担執筆した際に、このような背景をろくずっぽ調べず無批判に引用してしまったからである。私は引用に際してイディッシュ語原典の当該箇所を確認し、さらに「ヴァインライヒが紹介した有名な言い回しによれば」²¹と書いて本来の発言者は別人であるということを表示したつもりだったが、この発言がなされ受容される文脈にまで十分に目を配っていなかった。つまりは史料批判が欠けていたということであり、歴史研究者の末席を汚す者として猛省するしかない。

4. おわりに

最初に述べた通り、ここで書いた内容は既に誰かが調べたことを改めて再確認したものであり、私の独創になるものではない。ここで出典を書き記しておくことで、後々私にとって便利になることを想定してのものだ。だがもしも、これが出典を辿ろうとする人の助けになるのならば望外の幸福である。

¹⁷ ם. וויינרייך, דער ייוואַ און די פּראָבלעמען פֿון אונדזער צייט, ייוואַ-בלעטער 25 (1945): 13.

¹⁸ Maxwell, "When Theory Is a Joke," 264–265.

¹⁹ この成句がいかに典拠のない（あるいは典拠を誤った）孫引きをされてきたかについて、詳しくは、*Ibid.*, 264–272 で明らかにされている。

²⁰ リョテ説はカナダの研究者ジャン・ラポンスによって唱えられているが、私がラポンスの著書の英訳を繙いてみたところ、その出典が示されていない。マクスウェルは、ラポンスの著書においてリョテの出典が明確に示されたことは一度もなく、リョテのものとしてこの成句が引用される場合は常にラポンスからの孫引きであると指摘している。J. A. Laponce, *Languages and Their Territories*, trans. Anthony Martin-Sperry (Toronto: University of Toronto Press, 1987), 200; Maxwell, "When Theory Is a Joke," 266.

²¹ 拙稿「言語の数えかた——旧ユーゴスラヴィア諸国におけるセルビア・クロアチア語の事例から考える」エスニック・マイノリティ研究会編『多様性を読み解くために』（府中：東京外国語大学海外事情研究所、2020）、156。

ICCEES 第 10 回大会参加記録

辻河 典子

2021 年 8 月 2 日から 8 日にかけて、ICCEES (International Council for Central and East European Studies : 国際中・東欧研究評議会) 第 10 回大会がカナダ・モントリオールのコンコルディア大学を主催校としてオンラインで開催された。東中欧、バルカン半島からロシア、中央アジアまで広範な地域を対象とする様々な方法論 (文学、歴史学、政治学、地域研究など) の研究者が一堂に会する国際学会である。本来は 2020 年に同一日程で同校にて開催される予定であった。しかし、COVID-19 のパンデミックの影響で同年 4 月上旬にちょうど 1 年の延期が決まり、その年の秋に行われた参加予定者への意向確認を経て、Zoom によるオンライン開催に変更された。

以下では、私が企画責任者となったパネルについての報告を述べた後、オンラインで開催された国際学会の運営について気づいた点として、時差への対処、参加者間の交流方法を中心に振り返ってみたい。

今回私が企画したパネル“Image Creation Concerning Central Eastern Europe in the Twentieth Century”は、20 世紀の中央ヨーロッパをめぐる他者／自己の表象の事例を比較・検討することを目指し、司会を福田宏氏 (チェコ・スロヴァキア近現代史)、コメンテーターを重松尚氏 (リトアニア近現代史) にお願ひした。発表者は 3 名で、JA 日下氏 (英語圏文学) の“From Nepommuck to Mr. Gruber: Representations of Eastern Europe in English/Irish Literature”は『ピグマリオン』と『パディントン』シリーズから「他者」として表象されるハンガリーについて論じた。ヤロスラフ・ダヴィド氏 (チェコ旅行記研究) の“Going East—The Soviet Union and China in the Mirror of Czech Travel Writing in the 1950s” (発表はヤナ・ダヴィドヴァー＝グログロヴァー氏と連名) は、ソ連および中華人民共和国へのチェコ人の旅行記を題材として「他者」を通じて確認する「自己」イメージについて論じた。私の“Between National Unity and Local Identity: Intellectuals in Transylvania after 1918”は、トランシルヴァニアのハンガリー知識人の自己意識とハンガリー本国との関係から、「自己」と「他者」の位置づけの複雑さを論じた。各発表の後、重松氏から「誰が」「何のために」それぞれのイメージを構築したのかという問題提起があり、パネルの制限時間 (90 分) を最大限に使って議論が交わされた。

なお、このパネルは 8 月 5 日 (木) の現地時間 (北米東部夏時間) で午前 9 時、中央ヨーロッパ夏時間で午後 3 時、日本時間で午後 10 時に開始されたため、参加者全員がさほど大きな体力的負担がなく発表・議論が進められたのは幸運だった¹。

¹ プログラム公開後にキャンセルされたパネルも散見されたので、中には時差を理由に辞退するケースがあったの

次に、オンライン開催の国際学会の運営について気づいた点をいくつか述べたい。パネル等の企画ごとに Zoom の URL が設定されており、コンコルディア大学の学生・院生 1 名が技術スタッフとして Zoom のホスト、司会者・発表者・ディスカッサントが共同ホストとなった。パネルとラウンドテーブルは通常のミーティング形式で、レクチャー等はウェビナー形式で運用された。いずれの形式でも音声自動認識による英語字幕表示が選択できる機能が付いており、後で公開された動画でもこの字幕は表示されている。

言うまでもなく、国際学会のオンライン開催で参加者に最大の負担となるのは時差である。本大会では、パネル・ラウンドテーブル・レクチャー等の全ての企画の様子が録画され、参加者は学会終了後に期間限定で閲覧できるシステムが導入された²。私は興味を持ったパネルでは直接質問・コメントを伝えてリアルタイムで議論をしたかったこと、および後から動画を閲覧するつもりでも諸事紛れて忘れてしまうかもしれないと感じたことから、可能な限りリアルタイムで参加した。パネルの時間帯によっては、現地時間で深夜から未明にかけての時間帯に参加することになった人が口頭ではなくチャットでコメントを書き込んでいる光景も目にした。

大会参加者にはそれぞれアカウントと SNS のような専用ページが与えられ、写真や CV だけでなく、事前に発表用の資料をアップロードすることも可能であった³。設定すれば他の大会参加者のアカウントからのメッセージを受信することもできた（初期設定では受信不可になっており、確認した限りでは受信可に変更していた参加者は非常に少なかった）。

また、興味を持ったパネル・ラウンドテーブル・レクチャー等の情報をブックマークしておけば、個人ページのスケジュール欄から確認できるようになっていた。但し、このブックマークは他の参加者全員も閲覧可能であり、プライバシー保護との兼ね合いが気になった。同じような研究関心を持つ人に出会う機会を提供する可能性は確かにあるものの、特にネットストーキングと萌芽的な研究テーマの漏洩につながる恐れがある点では注意しなければならないと感じた。

では、オンライン上での学会参加者の間の交流はどのように行われたのだろうか。パネル用の Zoom ミーティングは制限時間（90 分）を厳守する必要があり、議論が尽きなかった場合にはネットワークラウンジと呼ばれるオンラインスペースに誘導された。Zoom ミーティングのホストである技術スタッフから紹介されたリンクを開き、画面上の表示に従って初期設定を済ませてネットワークラウンジへログインする。自分の周りにいる人々のアバターが画面に表示されるので、議論を続けたいメンバーを探して会話を開始する。ネットワークラウンジはヴァーチャルな空間でありながら、実際に移動して相手を探すという点で会場にいるようなリアリティも併せ持っていた⁴。

私が発表者および参加者として入室したいずれのパネルでも、司会、発表者、ディスカッサントを除けば数名しか参加者がいなかった。時差がある中で、参加者の間では企画ごとに設定された Zoom の URL にログインする必要があったため、専門分野に直結する等の強い動機がある企画に絞って参加する傾向があったのかもしれない。大規模な学会であれば、どちらにしても会場にいるのだからと、参加予

ではないかと推測される。現地時間で深夜から未明にかけての時間帯に発表を行う経験については、森下嘉之氏の体験記に譲りたい。

² 2021 年 8 月 19 日（現地時間）に大会運営委員会から届いたメールによれば、12 月 1 日まで動画が公開された。

³ アップロードした資料は大会参加者専用アカウントでログインしなくても閲覧可能であり、確認した限りでは資料をアップロードしていない人が大半であった。

⁴ 私が企画責任者となったパネルではネットワークラウンジへのリンクを紹介してもらったものの、私だけ技術的な問題で他の参加者とのやり取りができなかったため、別途 Zoom ミーティングを立ち上げて対応した。

定の二つのパネルの合間の時間帯に開催される少し専門外のパネルを大人数の参加者に紛れて見学したという経験は誰しもあるのではないだろうか。その中には、専門外すぎて議論について行けずに途中退室したことがある人もいるかもしれない。しかし、本大会ではミーティングの参加者数は実際に入室してみなければわからず、しかも参加者が少人数であれば退室しづらくなることもありうるため⁵、専門外のパネルであっても気軽に入室してみようとは考えにくかった人もいたことが推測される。

ネットワークラウンジが設けられなかった場合は、知り合いが同じパネルを聴いていることに気づいても、その人と直接やり取りをすることは難しかった。また、従来の対面開催であれば、会場の廊下を歩いている時に専門分野が少し離れるので同じパネルに参加することがない知り合いと偶然に会って雑談を交わすこともあるが、本大会ではこれに相当する機会を持つことは難しかった。

他方、研究者コミュニティ内で所属機関を跨いでハラスメントの被害を受けている者にとっては、この環境下では加害者と物理的に遭遇せずに済むため、心身の安全は守られやすいとも言えるだろう。無論ハラスメント自体が絶対に許されるものではなく、本大会でも運営委員会から反ハラスメントや権利保護の方針が大会ウェブサイトを示されている⁶。しかし、一度でもハラスメントの被害を受けた者は、加害者も参加する可能性がある学会に出向くこと自体が心身に多大な負担となる。たとえハラスメントが公式には否定されていても、加害者がこれを無視することは十二分に想定されるからだ。オンラインでの学会開催は確かに交流の場としては課題も多いが、ハラスメントの被害者にとっては加害者と物理的に遭遇せずに学会に参加可能な側面があることも忘れてはならないだろう。

また、オンライン学会の副産物として、パネル等が全て録画されて後から大会参加者が確認できるようになり、参加者のアクセス記録も大会主催者側に残されることになった。第三者が確認可能な形で記録が残ることは、ハラスメントと日々戦うことを強いられている者にとって心強いものとなりうる。もちろん個人のプライバシー保護や研究情報の保持との兼ね合いは検討されねばならないが⁷、パンデミックが終息して学会が対面のみでの開催に復帰したとしても、ハラスメントの発生を環境面から防止する取り組みは引き続き維持されてほしいと個人的には切望する。

最後に、言語使用の観点から本大会を振り返ってみたい。従来の ICCEES の大会では使用言語が英語もしくはロシア語と指定され、圧倒的多数の発表が英語で行われてきた。歴史的な経緯とグローバル化が相俟って、特に体制転換後は中央・東ヨーロッパを対象とする研究者の間での交流用言語として英語が選択されてきたことが指摘できる。

この傾向は今大会でも同様であった。今回はモントリオールでの開催のため、特例でフランス語も使用言語に追加されていた⁸。しかし、フランス語の使用例はごくわずかで、ロシア語のパネルが単独で成

⁵ ある参加者からは、少人数のパネルのミーティングに入室したところ、司会から開始早々にフロアの参加者にも後で発言を求めると予告されてしまい、退室しようにもできなくなったという体験談を聞いた。もちろん入退室に制限はないため、実際には入室して数分で退室した参加者も何度か見かけた。

⁶ Anti-Harrasment Policy and Code of Conduct: <https://sites.events.concordia.ca/sites/iccees/en/iccees2020/pages/26>

⁷ 地域研究系のパネルの中には現在のロシア・中東欧諸国におけるメディアへの統制など進行中の政治課題を扱ったものもあった。パネルの様子が録画されて事後に公開されることを警戒して参加や発言を躊躇した参加者がいた可能性は否定できない。

⁸ 実は、本大会がモントリオールで開催されると知り、パネルの採択が決まってから私が最も楽しみにしていたことは、現地での英語・フランス語の言語使用状況を自分の目で確認することであった。このため、現地に赴くことができず、非常に残念であった。

立していた例があったことと比べると、この地域の研究におけるフランス語のプレゼンスが現在は全く高くないことをうかがわせた。

次回の ICCEES の大会は 2025 年にロンドンで開催される予定である。その頃にはパンデミックも終息し、国境を越えた自由な往来が再開されていることを心より願っている。

ICCEES2021（カナダ・モントリオール／オンライン） 体験記

森下 嘉之

本稿は、2021年8月にカナダ・モントリオールにて開催された「国際中東欧学会大会（通称 ICCEES、以下、イクシーズ）」の参加体験記である。イクシーズは5年ごとに持ち回りで開催される国際学会であるが、「中東欧」と銘打ちつつ、事実上はロシア・旧ソ連圏の研究がメインであるため、その規模は非常に大きい。筆者は前回2015年大会でも発表を行った経験があるが、開催地が幕張であったため、国際学会という感覚はあまりなかった。今回は、EMSでもしばしば登場する多文化主義の「本場」ともいえるモントリオールでの開催であったため楽しみにしていたが、周知のとおり新型コロナによって延期・オンライン開催となり、カナダの地を踏むことは叶わなかった。

今回は、筆者のほかには香坂、角田兩名（以下、敬称略）とともに、「東西の都市計画・歴史的景観・文化遺産－チェコスロヴァキアとフランスを事例に」と題したパネルを組み、報告に臨んだ。第一報告は角田「ヴィシー政権期マルセイユの都市計画と建築家ボードワン」、第二報告は香坂「建国期チェコスロヴァキアにおけるポーランド境界地域の風景表象」、第三報告は森下「社会主義期チェコスロヴァキアにおける住宅政策と都市景観－日本との比較から」である。司会及びコメントは、チェコ・オストラヴァ大学のヤロスラフ・ダヴィド(Jaroslav David)氏に依頼した。氏の専門は社会言語学であり、筆者とは全く接点がなかったが、2019年夏に知人の紹介を通して、幸運にも快諾していただいた。カナダ渡航に対しては当初、資金面で難しいかもしれないという話であったが、オンライン開催によって結果的に（我々もそうだが）、その問題は「解決」されることになった。

報告内容そのものについて紹介すると字数を大幅に超えてしまうため、本稿ではパネル報告の経緯について簡単にお伝えしたい。パネルの企画を運営に提出したのは2年前（本来は1年前）の2019年夏であり、当時はチェコとスロヴァキアの「景観」を、フランスを通して相対化するという漠然としたコンセプトであった。直接の契機は、2018年夏に台北の政治大学で行われた「風景・景観」ワークショップであり、三者とも当時の報告の継承を意図していた。その意味では、手持ちの「カード」は既に揃えていた段階ではあったが、コンセプトを司会者のダヴィド氏に伝えるのは難関であった。もっとも、氏は言語学に加えて、学際的研究の経験から景観論と歴史認識論にも通じており、その意味で理解は得られたのではないかと考える。

以上が大会「1年前」の準備段階であったが、2020年春先のコロナ感染拡大に伴い、4月ごろには延期が発表された（オンライン化の決定はさらに後）。この間、他の報告者も同様だと思うが、眼前の変化に忙殺され、イクシーズ報告課題も頭の片隅に追いやられていた。ようやく2021年6月ごろから、

大会登録（参加費）や報告タイトル、プロフィールの確認などの連絡が届くようになり、本格的に「国際学会の準備」が現実の課題となった。パネル報告の三名は7月に入って三度のオンライン打ち合わせを行い、相互の報告内容・時間配分などを確認した後、大会に臨んだ。

さて、改めてイクシーズ大会についてだが、大会は全6日間に及び、報告本数は400以上を数えた。実際、幕張メッセで開幕した2015年大会は国際大会の名にふさわしい大イベントであったが、今回は「大会が開催されている」という雰囲気を感じることが、自宅からはなかなか難しくかった。北米との時差の関係上、現地の朝9時開始は日本時間の夜10時となり、大会はほとんどが日本時間深夜～未明となるため、参加できる報告も限られたものにならざるをえなかった。筆者らのパネルは現地時間16時にセッティングされたため、日本時間では午前5時、早朝未明にあたってしまった。開始30分前（4時30分）に、Zoomの「待機室」に集合した後、パネル報告は3人プラス司会、質疑含めて90分でつつがなく終了した。おおよそ予想していたが、参加はほとんどパネル関係者であり、英語で話すこと以外は、いつものEMSのオンラインとほとんど変わらない環境であった。報告時間は1人20分程度であり、突っ込んだ史料紹介に回す時間はなく、テーマの紹介でひとまとめにするという当初の方針は打ち合わせていたので、その点もほぼ想定内であった。筆者は、オンライン国際学会への参加は今回が初めてであったが、早朝という時間帯も相まって、パネル共同報告者が隣にいない中で英語でのプレゼンを行うことに若干の心細さを覚えた。もっとも、既に様々な分野においてオンライン国際学会は定着しており、今回の参加は取り立てて珍しい体験ではないだろう。最後に、報告者及び司会、オーガナイザーに加えて、早朝にもかかわらず我々のパネルに参加していただいた諸氏には改めて感謝申し上げたい。

今後の研究会活動に向けてのノート

—ロザンヴァロンの著作を一読して

松岡 格

1. はじめに

今年度の研究会活動は、ブルーベーカー『Grounds for Difference』書評回その他、ワークショップや研究報告、そして電子書籍企画が起ち上がってからは電子書籍のプロジェクトが中心となって展開した。

ここでは、今後の書評候補として考えているロザンヴァロン (Pierre Rosanvallon) の著作について下読みしてみた感想をごく手短かに述べておきたいと思う。

2. 『良き統治：大統領制化する民主主義』（みすず書房、2020）

今回私が下読みしたのが、『連帯の新たなる哲学』（勁草書房、2006）と上掲『良き統治：大統領制化する民主主義』である。

先に述べたいのが後者についてである。そもそもロザンヴァロンの業績を知ったのは、本研究会でヨプケの『軽いシティズンシップ』を読んだことがきっかけであった。そこで言及されていた「保険社会」をめぐる議論に興味を引かれたのである。そこで、それについて述べられている『連帯の新たなる哲学』、そして『良き統治』と読み進めていった。

これらの著作を読む一つの目的は、今後の書評候補になるかどうか検討するためであった。その結論から述べると、研究会では『連帯の新たなる哲学』を読んで議論する価値がありそうであるということである。『良き統治』は当面読む必要はないという判断に至った。

この2冊の解説文などを見ると、ロザンヴァロンの著作は歴史解釈やそれにもとづく議論で、どちらかという学術的業績として評価されるべきものと、時事評論的、またはある意味で著作自体が一つの政治的主張となっているような著述とに大きく分かれるようである。もちろん、いずれのタイプも類型化にどの程度の意味があるかはわからない。いずれのタイプに属するものでも、多少なりともどちらの要素を含むというのもまた真実であろう。しかし、『良き統治』に関しては時事評論的、または社会のあるべき方向を示す、提言の書となっていることは確かと思われる。

その提言について簡単に述べると、次のようである。いわゆる西欧諸国を中心として、近現代以降に発展していった民主主義国家は、議会中心の代表制を軸とする民主主義体制を造り上げたが、その議会政治に対する民衆の失望は科学的統治への期待を高め、結果的に統治者の執行権を拡大させた。本書で指摘されるのは、副題「大統領制化する民主主義」で示唆されているその執行権の肥大化である。そうした

統治者というのは民主的プロセスによって選ばれたとはいえ、統治者に強大な執行権が与えられ、(その統治者を選んだことになっている) 人民にとって統治施策などの執行過程等を外からうかがい知ることが難しい。そのような、「人民による自己統治とは言えない」状況を打開するため、統治者の選出のプロセスを重視する「承認の民主主義」ではなく、統治者の執行過程をより一層透明化し、人々がそのプロセスにより直接的にかかわっていく「行使の民主主義」をうち立てるべきである。本書は、そのような意味での「より見通しやすい社会」の実現を呼びかけている。

この議論では、前号で紹介したような「可視性」や、それと関わる「理解可能性」という用語が登場する。前号で筆者は、さまざまな「可視性」の意味や用法について整理を試みたが、ここで述べられているのは、より透明な社会、という主張にもつながりうる「可視性」であり、具体的には統治者の執行過程が社会を構成する人々の目から見て透明なものになるように、という意味が込められている。「理解可能性」というのは、執行過程やその意思決定が、誰から見てもわかるように、という意味が込められている。上掲書におけるロザンヴァロンの主張は、民主主義国家のさらなる民主化、を呼びかけるものと言える。

そのさらなる民主化、がどのように評価されるべきなのか、筆者には今のところ判断できない。しかし、今後の社会のあり方を考える時に多くの人々が参照する本になるかもしれない。

3. 『連帯の新たなる哲学』

上記のように上掲書『良き統治』は、今後その重要性を高める可能性がある著作なのであるが、本研究会で先に読むべきは『連帯の新たなる哲学』ではないかと思う。『良き統治』についてさらに付言すれば、書名やその議論において「統治」ということばがキーワードになっているが、これまでこの研究会で触れてきた「統治性」については言及がないし、直接は関わらないと思われる。一方で、全く関連していないとも言えないだろう。具体的にはこれから検証する必要があるであろうが、「統治性」をめぐる議論と、本書の論述はいくつかのポイントにおいて交錯しているものと見られる。また本書においてフーコーに対する言及は見られるが、すでに述べた主張につながる議論との関係でふれられているに過ぎない。この研究会においてフーコーを参照した統治に関する論述が複数にわたることを確認してきたが、これまで見てきたものとはまた別の展開の議論とも言えると思われる。

さて、『連帯の新たなる哲学』でロヴァンザロンは、「無知のヴェール」に覆われていた「保険社会」にもとづいていた福祉国家は破綻することを指摘した上で、「社会的なものの個人化」、同質ではない、多様な個別の個人からなる社会を想定した福祉国家の再建が必要であることを指摘する。個人化した社会では、同質な人々を想定した、統計的手法を用いた分析や、それにもとづく政策立案は有効性が低減する。福祉政策のあり方も見直しせざるを得ない。以上のような議論がなされている。

こうやって書いてみると、やはり『連帯の新たなる哲学』もロザンヴァロンの社会に関する問題意識と、その解決策についての提言を含んでおり、やはり時事批評的な本であると言えるかもしれない。

それであれば読む必要はない、というご意見もあるかもしれないが、「無知のヴェール」をめぐる説明、また個人化社会というものの見立ての妥当性、ヨーロッパ各国の状況やその後の展開、等等について研究会にて議論すれば生産的な活動になるのではないかと考えた。

以上、今後の研究活動の参考になれば幸いである。

電子書籍『多様性を読み解くために』の授業内使用に関する報告

香坂 直樹

1. はじめに

本稿では、エスニック・マイノリティ研究会の電子書籍企画の第一弾として、2021年に発行した『多様性を読み解くために』（エスニック・マイノリティ研究会編、東京外国語大学海外事情研究所、2021年）（以下、本書）を、大学の初年次教育の授業で実際に使用した事例に関して報告する。

本書は企画・編集時点より大学の学部生の授業での利用も視野に入れつつ、内容構成やテーマ設定、文章の書き方などを検討したうえで作成された。では、読者層として想定された大学の学部生は本書をどのように読み、どれだけ理解したのか？この点に関して実際の使用例を紹介したい。

2. 本書を利用した授業について

2-1. 授業の概要

2021年春学期に、筆者が担当した学部生（国際学部）の初年次学生の必修科目として開講された演習授業の講読用テキストとして本書を利用した。事前にシラバスで「多様性」をテーマとして取り扱うと公表しており、全12名が受講した¹。

この授業では、大学の学びに向けた基礎学力を学生に付けさせることも授業目標に設定されており、具体的には教員による複数回のレポート添削と書き直しを通じたアカデミック・ライティングの指導も進めることが担当教員の共通理解だった。そのため、自分の担当クラスでは、レポート改善に向けたピアレビュー実践に2回の授業をあてた。そのほか、初回のイントロダクションや授業内図書館ツアーも実施しており、講読にあてた授業は10回となった。

なお、この授業は対面式での開講を計画し、4月初め春学期開始時点では実際に対面式で開始した。しかし、2021年4月下旬からの首都圏における新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の発令に伴い、途中から遠隔方式（Microsoft Teams 利用の同時双方向式）による授業に移行した。さらに6月中旬の緊急事態宣言解除後は、対面式を基本としつつも、希望者は遠隔方式で受講するハイブリッド方式で実施するなど、学期途中での授業形態の変更を迫られた²。

¹ この授業のクラス定員は10～20名であり、学部が実施するクラス振り分けでは学生の希望がある程度反映された。

² 後述するが、本書をこの授業で利用した時期は緊急事態宣言の発令の影響を受けて授業形態が対面式（4月13

2-2. 講読テキストの選定

自分の担当クラスでは、「多様性を考える」という大きなテーマは設定したが、そのうえで様々なスタイルや種類の文章に触れさせること、あるいは具体的な課題や論題を多く紹介することを狙いとした。そのため、講読に用いるテキストの選定では、当初から一つの文献を通読することは考えず、複数の教養新書や一般書、専門書などから一部の章を抜粋して読む「つまみ食い」方式を採用した。

その中で本書『多様性を読み解くために』は現在の世界に存在する多くの課題や論点への気づきを促す入り口にあたる文献と位置付けた。また、本書が初学者を読者に想定して編まれたことを踏まえ、授業前半で講読するテキスト（講読回 10 回の内の前半 5 回分のテキスト）として選んだ。その後、授業の後半では、ナショナリズムに関する新書や現代フランスのライシテの問題を扱った書籍の講読へと段階を進めた。

また、本書から具体的にどの章を講読するかは教員から指定はせず、初回のイントロダクションで報告グループを設定³した後に、受講者とともに選択する方法を選んだ⁴。

受講生との話し合いの結果、『多様性を読み解くために』からは、第 4 章「場所の名付けと記念の力：アメリカ合衆国を事例に」（4 月 13 日：日付は授業で講読した日、以下同じ）、第 13 章「食文化について：彝族の例とともに考える」（4 月 20 日）、第 8 章「歴史認識と多様性：ブダペシュトのドイツ占領による犠牲者の記念碑を手がかりに」（5 月 18 日）、第 1 章「多文化主義と国民国家（ネーション・ステート）」（6 月 1 日）、第 2 章「ナショナリズムの二分法について」（6 月 15 日）を選び、授業で利用した。

なお、第 I 部の論考の講読を後に回したのは、まず世界各地の事例を知ることが優先し、その後に多様性と表裏一体となるナショナリズムについて理解することを意図したためである。

3. 学生による本書の読みについて

テキスト講読では、一つの報告グループが報告レジюмеに基づいてテキストの要約を報告するとともに論点を提示し、その後に受講生がディスカッションする方式を採用した⁵。そのため、本節では、報告レジюмеの内容を基礎資料として、学生による本書の理解を紹介したい。

3-1. 初期の報告（第 4 章、第 13 章、第 8 章）

授業前半の報告では、報告レジюмеの事前添削と当日の報告の聞きにあたり、レジюмеの作成方法とテキストの正確なパラフレーズ、パラグラフごとの関係性の把握を重視した。当方の主観では、レジюме草案の作成時点でパラグラフ内の要約はある程度正確にできていたものの、パラグラフの関係性や論理構成の把握へと進められない例が多く見られ⁶、事前の添削でも論理構成の把握の要を繰り返し指摘した。また、本文中に登場する用語の意味や登場人物についての調べも報告グループに課したが、それを守れ

日、20 日）から遠隔方式（5 月 18 日、6 月 1 日、6 月 15 日（ハイブリッド方式））へと移行した時期に重なる。この授業形式の変更も本書の講読に影響を及ぼした可能性がある。

³ 全 12 名の受講者を 4 名ずつに分け、3 つの報告グループを設定した（なお、学期の途中で報告グループをシャッフルした）。

⁴ 講読テキストの選定にあたり、本書の PDF ファイルを学修支援ポータルサイト経由で事前配布するとともに、初回の授業では各章のプリントアウトを教室に持ち込み、参考資料として回覧した。

⁵ 報告レジюмеと論点提示に関しては、授業前の教員による添削と修正を経た上で、授業で報告させている。

⁶ このような傾向の背景として、グループ内で学生がテキストを分割して各自の分担部分の要約を作成し、その後に複数の要約をつなぎ合わせる形でレジюмеを作成する手法を採用していたことも影響している。

ないグループも見られた。

概して、初期の段階では、文章の要約のみにとどまり、テキストで紹介されている事例を掘り下げるまでには届かない報告となった。

その点は報告グループに課した「論点提示」の内容からも確認できる。

第4章(4月13日)の報告グループが作成した「論点」は、本書第4章の本文でも言及されている(p.57)北海道のアイヌ語地名を入り口にしてしたが、現在の日本におけるアイヌの社会統合について改善の要を総論として提示するに留まる。

また、第13章(4月20日)では、アボリジニの食材の事例を紹介したものの、そこからハラールなどの食のダイバーシティを今の日本で提供すべきとの理念の提示へと飛躍し、具体的な課題を言及するには至らなかった。第8章では、従軍慰安婦問題を例に挙げつつ日韓での歴史認識をめぐる問題に触れ、当事国双方の立場に立つことで「本当の論点が見える」との表明に留まった。

いずれの報告でも本書巻末のディスカッショントピックを参考にした「論点提示」とはならなかった。むしろ、報告レジュメを受けて、授業内で具体的な議論のポイントを紹介し定める際にディスカッショントピックを参考にすることが主となった。

また、本書で取り上げられた事例をそのまま掘り下げるより、自分が理解できる他の事例(主に日本が関わる例)に適用する形で置き換え、その例を引く形で論点の構築を図る例が多い。本書で紹介された事例そのものへの理解が深まらなかった結果だと考えられる。今回の授業では、まずは世界各地の事例に触れさせるために、第II部以降の章の講読を優先したが、その意図を結果につなげるためには教員からのより積極的な基礎情報の提供が必要であると感じさせられた。

3-2. 中盤の報告(第1章・第2章)

一方、授業中盤で扱った第1章と第2章の報告の「論点」からは傾向の変化も確認できる。

第1章の報告グループの「論点提示」では、本書でも紹介された(pp.18-20)オーストラリアのニューサウスウェールズ州における多文化主義政策の実践について、別の文献を引用しながらより具体的に紹介した。多文化主義の実践に関する具体的な論点を提示するまでは至らなかったが、テキストで扱われた事例自体を考察する態度を確認できた。さらに、同グループでは、2000年のシドニーオリンピックの開会式の公式動画を報告資料として用意していたことも評価できる。

また、最後の第2章の報告グループの報告レジュメでは、論点として日本のエスニック・ナショナリズムとアメリカのシヴィック・ナショナリズムを対比させ、それぞれにどのような包摂と排除の論理が起動しているかを整理した。国家制度の観点からのみナショナリズムを捉え、またシヴィック・ナショナリズムと市民的ナショナリズムを類似の現象として認識するなどの読み違いも確認できるが、第2章がテーマとしたナショナリズムの二分法を理解したうえでの論点を設定するべく試みたといえる。

4. まとめ

以上、本書『多様性を読み解くために』の実際の授業における使用例を紹介した。筆者の実践例のみではあるが、幾つかのポイントを指摘したい。

第一に、本書各章の長さ(本文約8,000字程度)は初年次の学生にとっても要約作成の練習に相応しい量であることである。初期はパラグラフ間の関係性の把握に苦労したグループも見られたが、グループ

内で分担しつつもレジュメを完成できなかった例はなく、また中盤からは論理構成の把握も容易に行え、論点作成にもある程度反映できるようになった。

第二に、本書はオムニバス形式で編まれているため、受講者が自らの関心にあった章を見つけやすいことである。今回の実践では、食やオリンピック、地名などのテーマが受講生の関心を引いた。この点は受講生次第で変動すると思われるが、身近なものを入り口とした章への関心が高いことを改めて確認できた。

第三に、その一方で、引き付けた関心を受講生の読みや理解につなげるためには、教員の積極的なサポートが必要になると改めて気づかされた。今回の授業では、受講者が用意した報告レジュメへのフォローないし補足情報の提供という形で補ったものの、やはり学生単独では報告準備時にディスカッショントピックを参考にしないなど限界があった。本書で取り上げた事例やテーマへの理解を深め、本書の意図を学生に伝えるためには、より積極的な教員からの介入が必要であると感じた。ただ、この点は本書自体の課題ではなく、授業設計の課題でもあるので、2022年度の授業では改善を図りたい。

以上、分析ではなく報告に留まるものの、続編の作成が進む中で、本書『多様性を読み解くために』の使用例として参考になれば幸いである。

会員近況報告

2021年6月の半ばに、大学院のある米国ニュージャージー州に戻ってきました。2年ぶりのことです。元々こちらを出る時は、博士論文のプロジェクトのため2年間の資料調査で留守にするつもりだったので、計画通りではあったのですが、コロナのおかげで計画はずいぶん変わって（ポシャって？）しまったなあと、しみじみ思いました。幸い、観光の街ではないので、コロナ禍のために閉店したお店は少なく、東京近郊よりは街並みが変わっていない印象を持ちました。米国は春からワクチンの供給が進んでいるため、到着した翌週に1回目を摂取することができ、7月頭に2回目も摂取できました。それからは友人との食事にも、たびたび行っています。日本にいた時は、とくにお正月以降、気軽に人と会う気分になれず、まさに「自粛 (quarantine)」の状態が続いていたので、ギャップに随分驚きました。日本がオリンピックを経て大変な状態になっているとはいえ、感染者数の数字だけ見れば、米国もデルタ株などのために悲惨な状態です。なのに、なんだかこの国にいと、まるでコロナが終わってしまったかのように錯覚してしまう時があります。夏休み中、ハワイやカリブの島々に旅行に行く人々が絶えず、現地は大変なことになっているとニュースや人伝に聞くたび、とても不平等だなと、いたたまれない気持ちになりました。

学期が始まるのは9月にもかかわらず、こちらに早めに戻ってきたのは、2ヶ月間、タガログ語の授業を受講するためでした。オンラインとはいえ、日本から受講すると時差で体調を崩すことがわかっていたゆえの決断でした。私が参加した、**Southeast Asian Studies Summer Institute (SEASSI, 東南アジア研究夏期プログラム)**は、1983年に始まった東南アジア言語の集中プログラムです。ホストの大学の街に、世界中から言語教師と、主に米国中の大学から学部生、大学院生、その他の立場にいる言語学習者が集まり、1日4時間・週5日間の授業と様々なイベントを運営に参加しながら、夏を過ごします。2019年の夏にもこのプログラムに参加したことがあり、言語習得の効果はもちろん、東南アジア研究者が各地から集まってくるリソースの豊富さに圧倒されました。この夏は、コロナの先行きが不透明なのと、海外を拠点にしている教師が多く移動に制限があることから、残念ながらオンラインの開催となりました。それでも、振り返れば2年前と同様、たくさん得るものがあつたなあとと思います。

この言語プログラムのほかに、自身の研究に絡めたエッセイ “**Japanese Mixed-Race Children in the Philippines, Then and Now!**” を **Immigration and Ethnic History Society** という、米国移民史学会のウェブで出版しました。9月から始まる新学期は（こそは！）、博論執筆を頑張ろうという感じです。（2021/08/28 北田依利）

最近ヴィーガン志向の食事を心がけるようになりました。意外なものに卵や乳が使われているので、食

べられるものを見つけるのに少々苦勞します。ですが、ヴィーガン料理屋が実は近くにあったりと、発見も多いです（最近は大学の近くのファラフェル屋によく行っています）。立場が変わると、それまで見えなかったものが見えるようになったり、同じものがそれまでと違って見えるようになったりするということを、改めて実感しています。（2021/09/05 重松尚）

国境を越えるドゥンガン人ネットワーク

2020年2月、カザフスタン南部のマサンチ村で、カザフ人とドゥンガン人が衝突し、10名以上の死者が出たことが世界のメディアで報じられました。ドゥンガン人は、19～20世紀に中国領からロシア・ソ連領中央アジアに移住したムスリム（7世紀以降中国に移住した西・中央・東南アジア出身のムスリムの子孫。現代中国の回族にほぼ相当、歴史的呼称は回民）の末裔で、中央アジア社会に適応しながらも、独自の言語や文化を維持するための努力を続けてきた人々です。近年は中国との貿易によって商業的に成功を収めた人も少なくないと聞きますが、一部の報道によると、マサンチ村で起きた暴動の背景には、ドゥンガン人との経済格差に対するカザフ人の嫉妬や不満があったようです（ただし、騒乱の原因については諸説あります）。

当時、私はウズベキスタンの首都タシケントに長期滞在中でした。マサンチ村での事件が発生した直後、インフォーマントのドゥンガン人の方（ウズベキスタンのドゥンガン協会会長）から、同村出身のドゥンガン人青年が義捐金を集めるためにタシケントに来ていると教えてもらい、彼の歓迎会に参加させていただきました。その青年は中央アジア各国のドゥンガン人コミュニティを巡って義捐金を受け取ってきたのですが、中にはロシアや欧米に暮らすドゥンガン人からも支援の申し出があったそうです。国境を越えた彼らのネットワークや連帯感に驚嘆するとともに、中国での政治的混乱を逃れて中央アジアに辿り着いた回民の子孫が、今なお移住先で不安定な立場に置かれているという事実に大きな衝撃を受けました。

それから間もなくして、新型コロナの世界的流行のため帰国を早めることになりました。事件現場となったマサンチ村を訪れることは叶いませんでしたが、「ドゥンガン人もカザフ人も安心して暮らせるマサンチ村を取り戻したい」と語っていた青年の真っ直ぐな眼差しが強く印象に残っています。

なお、2020年9月から21年4月まで滞在したニューヨークには、カザフスタン出身のドゥンガン人一家が経営するドゥンガン料理店があり、美味しい麺や餃子を食べて何度か通いました。彼らもまた、故郷の惨状や同胞の危機に胸を痛めており、援助を続けていきたいと話していました。

一連の出来事やドゥンガン人の方々との会話を通じて、「民族」としての一体感はいかにして生まれるのか、ディアスポラにとって移住先からの更なる移動にはどのような意味があるのかなど、さまざまなことを考えさせられました。（2021/09/20 海野典子）

なかなか先行きが見通せず、長期化するコロナ禍において学会・研究会はオンライン開催が主流となりつつある。EMSも一昨年来、オンライン・ミーティングの形態での開催が続いている。対面の場で生まれるコミュニケーションの得難い時間を少しノスタルジックに思い浮かべる一方で、そうした豊かな余剰を削ぎ落しながらも、移動の労なく遠隔地にいる方々とのやりとりを可能にしている「オンライン」の即物的な機能性もまた凄いものだと実感している。

しかし、オンラインの学会・研究会では（職務上のウェブ会議やオンライン対応の授業等と同様に）、

自分が接続を行う身の回りの空間を背後に抱えて参加する、という当たり前のことをしばしば意識させられる。PC画面の中でアカデミックな場と繋がりながら、特に自宅から接続する場合には、自室、ひいては家族と共有する物理的な空間(!)と繋がったままになる。いちど研究会報告の際に、気づいたら子どもがパンダのぬいぐるみを映り込みそうな所へそっと「潜入」させていたことがあって、とてもびっくりした。

時間が経てば笑い話にもなるのだけれど、後背に物理的な私的空間を抱えたまま、オンラインで公的な場に接続することの「躊躇い」や「億劫さ」の意味合いはもう少し深く考えられてもいいかもしれない、と最近とみに思う。もし自室(自由に使える空間)がなかったら、もっと小さな子供がいたら、要介護の家族がいたら…さまざまなケースが想像できるかもしれない。それが働く者、研究する者、学ぶ者(学生)の「個人の事情」に押し込められてはいないだろうか。このところ次第にウェブ・ミーティングの場では、発言者でない者は「ウェブカメラ・オフ&ミュート」が新たな「マナー」ともなりつつあるが、それで済む問題なのかどうか。公的空間と私的空間の境界線または断絶を、個人の身体や意識の中に抱え込むことは、誰もが直面する新たな常識——いわゆる「ニュー・ノーマル」として受容してよいものなのだろうか。あるいは、これらのトピックについて考え続けなければならない、そのことこそが「ニュー・ノーマル」なのかもしれない、と思う。(2022/03/20 栗林大)

今年2月下旬からロシアによるウクライナ侵攻が始まった。ウクライナの隣国にあたるスロヴァキアのメディアも、戦況に加え、ウクライナとの国境を越えてスロヴァキアに流入する避難民(3月18日時点で約24万人、UNHCR発表)の状況を刻々と伝えている。

このスロヴァキアとウクライナとの国境は、2000年代以降に自分も何回か通過した場所でもある。2000年代初め当時のスロヴァキアはEU加盟候補国の地位を有し、チェコやオーストリアとの西側国境の警備体制が次第に緩和されていた。その半面、新たにEU内外の国境となるウクライナとの国境の警備は強化されつつあり、自分もウクライナとの国境を通過するたびに、西部と東部の国境警備体制との大きな違いを如実に感じていた場所でもある。

この国境の話は、その後の変化——スロヴァキアのEU加盟とシェンゲン協定への参加に伴う東西国境のコントラストの強化——を含めて、自分の担当授業の中でたびたび取り上げてきた。しかし、今回の戦争の報道を耳にするたびに、国境が持つ意味を自分は甘く捉えていたのではないかと自問している。

また、もう一つ、2000年代初めのスロヴァキア留学時に通学した外国人学生向けの大学入試準備学校の情景も脳裏に浮かんできた。まだ旧ソ連圏からの留学生受け入れが多く、基本的に全寮制の準備学校において、ロシア語を共通言語とする旧ソ連諸国(ロシアやウクライナ、カザフスタン、ウズベキスタンなど)の出身学生が大きなグループを作っていた光景である。彼/彼女らは昼夜を問わず仲間内でつるみ、飲み、騒ぎ、ときに喧嘩し、寮内でも強い存在感を示していた。それでも「あいつはロシア人だから…」であるとか、「ウクライナ人は…」という考え方はしておらず、その他の学生たちも彼/彼女らを「旧ソ連組」とまとめて見ていたように記憶している(それはそれでまた別の問題を持った視線なのかもしれないが)。

それから20年近くの時間が流れ、状況も変わってしまっている。寮の光景は2000年代初めという限定的な時間でのみ起こりえた話かもしれず、その時の学生たちもブラチスラヴァの寮での体験など忘れてしまっているかもしれない。ただ、自分は記憶に留めておきたいと思う。(2022/3/20 香坂直樹)

2022年2月、ロシアのウクライナ侵攻による戦争が始まってしまった。人口300万人近い首都をロシア軍が包囲し、核攻撃も示唆するなど、数か月前であれば想像もできなかった事態が生じている。ウクライナと地理的に近い中・東欧諸国には数百万人規模の避難民が逃れてきており、エネルギー資源の問題なども報道されている。現状、戦争の早期終結は望めそうもなく、さらなる戦争被害と犠牲者の増加が避けられない状況となっている。また、経済制裁の影響でロシア上空の航路が利用できなくなったため、日欧の往来はコロナに加えて困難を増している。中・東欧はしばしば、「大国の狭間/冷戦の最前線」のような説明がなされた地域であり、確かに、歴史を振り返れば紛争や緊張が絶えず続いてきた。現代史においても、第二次世界大戦さらには「1956年」や「1968年」「1989年」などの歴史的経験を有している。こうしてみると、以前にも記したことであるが、21世紀初頭から2020年頃までの20年弱は、中・東欧諸国にほとんど障壁なく出入りできた例外的な時期であったと後から振り返ることになるのだろうか。中・東欧諸国の歴史的経験の苛烈さを、知識としてはわかっているが、国境の垣根が表向き取り払われ、経済発展を享受しえた「例外的な時期」において、知らず知らずのうちに忘却してしまっていたのではないかと自戒する日々が続いています（あくまでも個人的な感想です）。（2022/03/20 森下嘉之）

2022年2月24日に始まったロシアのウクライナ侵攻は、コロナ禍から一進一退を繰り返しながら日常を取り戻そうと模索していた世界に、尋常ならぬ衝撃を与えた。これを書いている今も、ロシア軍の攻撃、特に民間人への攻撃が激しさを増しており、予断を許さない情勢が続いている。既に多くのロシア・ウクライナに関わる研究者や国際関係・安全保障関連の研究者によって詳細な分析が進められており、私も日々その知見に学んでいる。そのような中では屋上屋を架すことになるが、日本を拠点とするハンガリー近現代史研究者という立場から感じたことを二点記したい。

ひとつは、この戦争を歴史から考える時にユーラシア的な視野を持つことの大切さである。ハンガリー近現代史を研究する私にとって、ウクライナと聞いてまず思い出すのは、ハンガリーと北東で国境を接する国であること、そしてザカルパッチャ州が第一次世界大戦末までハンガリー王国領であったことから今も十数万人のハンガリー語話者が居住していることである。戦闘で犠牲になったウクライナ軍兵士の中にこの地域から動員されたハンガリー人男性が含まれていたニュースをハンガリー語メディアで目にした。ウクライナの民族的少数派では、ハンガリー人の他にも高麗人の義勇兵が亡くなったというニュースを見かけた。この戦争は、確かに「ロシア対ウクライナ」や「ロシア対NATO」という構図で説明される。しかし、ロシア軍やウクライナ軍の軍人・軍属として動員されて時には負傷したり命を落としたりする人々、あるいはロシア軍の攻撃によって負傷・死亡したり難民となったりするウクライナ在住の民間人には、民族的にはロシア・ウクライナ以外のルーツを持つ人々がいる。「ロシア対ウクライナ」という表現が覆い隠してしまう存在があることを意識しておきたいと思う。

もうひとつは、この戦争が4月にハンガリーで予定されている総選挙やその後のハンガリー政治に及ぼす影響の可能性である。ウクライナに侵攻したのは、オルバーン政権と近年蜜月関係を築いてきたプーチン大統領率いるロシアである。他方、上記のようにウクライナはハンガリーと歴史的に深い関係を持ち、在外同胞であるウクライナ国籍を持つハンガリー人が現在進行形で戦争に動員されている。ハンガリーに住む市民たちは戦火を逃れてウクライナから到着した難民を積極的に支援している。

周知の通り、近年のハンガリー政府は明確に反EU、親ロシア・中国の立場であった。しかし、開戦後

のオルバーン首相は EU への同調を示し、ハンガリーを戦争に巻き込ませないというアピールを一貫して繰り返している。但し、この「戦争に巻き込ませない」という主張の下で、NATO のウクライナへの武器供与には反対している。これに対して、マールキエザイ・ペーテルを首相候補とする野党連合は積極的な軍事支援を主張する。3月16日にポーランド、チェコ、スロヴァキアの各首相がキエフを訪問し、スロヴェニアの首相らとともにゼレンスキー大統領とウクライナへの軍事支援やロシアへの制裁強化などについて会談したこともオルバーン政権とは対照的である。その一方で、ハンガリーがウクライナからの難民の人道支援に積極的であることは政府を挙げてアピールしている。これまでのオルバーン首相によるポピュリスティックな政治手法を思えば、この3週間余りの言動も総選挙を意識していることは想像に難くない。

当然であるが、同盟や政治的な近さは当事国それぞれが持つ利害関係が複雑に絡み合いながら成り立つ。これまで親ロシア的と言われてきた諸国の間でも2月24日以降の反応は様々である。ロシア軍の攻撃が一刻も早く停止されることを願うとともに、これまでの親ロシア政策をふまえて今後のハンガリーの内政・外交の動向についても注視していきたい。 (2022/03/20 辻河典子)

執 筆 者 一 覧

香坂 直樹	跡見学園女子大学等兼任講師
辻河 典子	近畿大学文芸学部准教授
中澤 拓哉	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター非常勤研究員
森下 嘉之	茨城大学人文社会科学部准教授
松岡 格	獨協大学国際教養学部教授

編 集 後 記

今回は刊行時期が特に遅くなってしまい、申し訳ありませんでした。ここにやっとお届けすることができます。

第5号に原稿や会員近況をお寄せくださった皆様、誠にありがとうございました。今号も会員の皆様のご助力のおかげで無事刊行できたことを心より感謝申し上げます。

(松岡 格)

ENSG (Ethnicity, Nation, State, and the Globe) No.5

エスニック・マイノリティ研究 第5号

発行：2022年3月20日

ISSN 2432-9576

編集委員（名字五十音順）:

遠藤嘉広、JA 日下、栗林大、香坂直樹、森下嘉之、松岡格（編集長）

発行所：エスニック・マイノリティ研究会

〒340-0042 埼玉県草加市学園町 1-1

獨協大学国際教養学部 松岡研究室内

URL: <https://sites.google.com/site/emstudies/home/ensg>

ENSG に掲載された論文等の著作権は著者と編集委員会がともに保持する。無断転用・転載を禁じる。
Copyright ©2022 by individual author and ENSG Editorial Board. All Rights Reserved. This material may not be published or reproduced without permission.